

川井教授は、本書で特異なことは時代錯誤と思われようが私たちの研究を担当していた仲間に分担執筆してもらったこと、と述べているが、ねらった内容の特徴と共にそうした共著する上の特異さがこの書物の生命ではなからうか、そんなことをまづ考える。そのために骨組がしっかりとて、直截的な表現に統一されてどれだけ読者の理解を容易にし、また内容の密度を高めたことか。この書物はなによりもそうした個性を感じさせる。

目次を一見してわかることであるが、基本的な要点を尽くす一方では、最近の知見を余すところなくとりあげているから、ひとり専門域の研究者に示唆を与え関心をよぶばかりでなく、実地医家、研修医、学生にとっても座右にあって極めて利便が与えられる。

考えてみると、胃は疾病頻度の上からみても日本人にとっては比較的なじみ深い器官の一つであるが、なぜか学者の多くは研究対象としてこれを避けて通った。むしろ「胃ぶく

□書 評□

「胃 その形態と機能」

京都府立医科大学教授
編集 川 井 啓 市

札幌医科大学教授
和 田 武 雄

ろ」などと呼ぶやや卑しめた表現がそのまま学問の世界にも似通った風潮を感じさせたものである。したがって、胃についての基礎的な研究はほとんど一世紀近い間足踏み状態にあったとみてよい。しかし近年は、わが国における胃内視鏡学・エックス線診断学の進歩がこの学問の停滞を打破する契機となったが、それをもたらした諸家の一人に川井教授があげられる。一方、本邦でのこうした形態面からの進歩に対して、機能面の成果は欧米諸家にゆずらざるを得なかったが、中でもガストリンの抽出とその合成の研究は展開の契機

をつくった。

通読してあらためて本書に魅力を感じることは、執筆者の一人一人がそれらの面でも本邦で、いち早く自ら手がけた人たちであるから、それだけに内容が深く、新鮮で、しかも確かな点にある。時には明日の学問を語りながらも決して晦渋難解ということがない。

形と働きとを結びつけようとする学問の姿勢は、それ自体、モノに言葉を与え、そのものに痛みを訴えさせようとするダイナミックな意図に拠るところであるから、セクト主義のよくするところではない。むしろ一人のよくなし得るところでもない。川井教授とその同志の協力によってこそこの成果をあげ得たことであり、あらためて著者たちの意図に成るこの《胃学》が、広く《医学》全般に夢を与え、新風をまきおこしたことを喜びとする。また今後への大きい期待を寄せたい。

B 5 頁270 図135 写真30

原色図33

¥16,000 ㊦300 医学書院刊